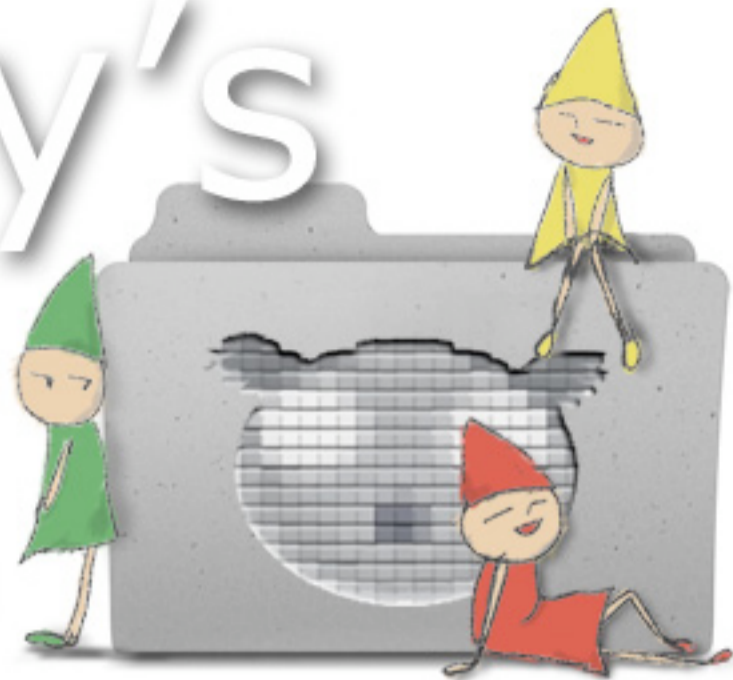


Nobby's Voice



満を持してリリースされたOwl's Nest、バージョン1.0の完成を記念して、今作にも深い関わりを持つ今世紀最後のエンターテインメント系アイコン作家、Nobby先生に、直接お話を伺う事ができました。

— まずはバージョン1.0の完成、おめでとうございます。今の率直な感想をお聞かせ願えますか。

「長かった……。うん。とても長かった。シチリアで今回の依頼を受けた時—そう、確かあれは1996年の冬だった—、正直に言って『これは厄介な案件になるな』と感じたんだ。なぜなら、Owl's Nestというソフトウェアの方向性を絵画的表現のブリミティブに置き換える事が、当時の僕には非常に困難に思えたからさ。だって他に類を見ないソフトウェアじゃないか。

……だが、何ヶ月にも及ぶ打ち合わせの場を通して、彼ら開発チームの熱意は十分に伝わった。だから僕は手持ちの仕事を片付けると同時にこちらから再度彼らにアポを取り、『……引き受けよう。ただし、アイコン完成の時期は地中海の風に聞いてくれ』と答えたんだ」

— 要するに、締切から全力で逃げたのですね。

「シャーラッパ！（黙れ）」

— わかりました。それでは今作に込められた思いなど、お聞かせ下さい。

「僕の場合、いつだって、筆を手にしたときに意識するのは、世界のバイブレーション。それだけさ。

僕はある種の霊媒のような役目として、世界そのものが我々に求めている事柄を抽象表現として取り出し、それをできるだけ損ねないように我々の認識できる形として、『アイコン』というひとつの明確なフォーマットに落とし込む……。

それは例えるなら恋愛に似ている。僕らは誰一人として、恋そのものを形として認識する事はできないね。けれど、きっとみんな、何か別のものとして恋を認識する事はできるはずさ。……たとえばこの胸の高鳴りとして。あるいは流れ落ちる涙として。涙の数だけ強くなれるよ。アスファルトに咲く花のように」

— 最後、パクリましたね。……なるほど。そうしてできたアイコンの原案が、これですね（図1参照）。

【図1】



先生が描かれた、最初のデッサン。

「このままでも十分完成品として勝負できると感じた」との事だが、可能性を模索するためにあえて外注に肉付けを依頼したのだと言う。

「誤解を恐れずに言えば、最初から勝負は見えていた。それはつまり『このNobbyが作品を担当した時点で、失敗などあり得ない』という事なんだ。

このイラストに見える躍動感がわかるかい？ あえて遠近法を無視し、黒一色の線画で世界の理（ことわり）を描いたわけだね。ただしディテールには細心の注意を払い、背景にはMac OS X Leopardデフォルトのフォルダアイコンを引用する事で、統一された文法がそこにある事を示しているのさ」

ー フォルダのアイコンを使うと安易に面積が埋められて楽ですよ。

さて、そして、仕事場の後輩に描いてもらったのがこれですね（図2参照）

【図2】



仕事場の後輩が描き足した繊細な図。

「良いセンを言っているが、初期のダイナミズムがない。最後に僕自らが、この作品に魂を付与する必要がある、そう感じた」

「このイラストが外注のイラストレータ（通称、仕事場の後輩）から僕に送り返されてきた時、何だか感慨深いものを感じたものだ。その時刻、僕はちょうど、夜のキッチンで執事とペロポネソス戦争（紀元前431年）の解釈について多面的な議論をしていたのだけど、思わず僕のデビューの頃の話に脱線させてしまったくらいさ。

それはつまり、80年代初頭にエンターテインメント系アイコン作家としてデビューした僕の系譜が、脈々と現代の若者たちに引き継がれている。それを如実に感じられたからなんだ。つまり、彼女の描いたイラストは、僕の描きたかったアイコン、そのものだったと言える」

ー そんな後輩からのメールの本文には、東京出張中のNobbyさんに対して「メイド喫茶は楽しめましたか？」と書かれてあったそうですね。

「シャーラッパ！（行ってません） 出張というのは誤解だね。トーキョーシティには、ある学会のシンポジウムに招待されて日帰りで訪れたのだけど、それを逆手に取ったアメリカン・ジョークの一種だ。さて、最後に、僕が魂を付与した最終段階のイラストを以下に示そうじゃないか（図3参照）」

【図3】



「色を塗るといのは結局のところ、

対象の立ち位置を定め、そこに命を吹き込む行為に他ならない」、そうってNobby先生は小さく微笑まれたのです。

ー ……キャラクタにありがちな色を塗って、

フォルダのアイコンを以前のバージョンのに戻ただけですよ。これ。

「世の中で広く大きな誤解を受けている事象を二つ挙げるとすれば、それはカモノハシと僕の仕事ぶりさ。

カモノハシは嘴を持つほ乳類なんかじゃない。彼らはただ、ちょっと悪ふざけをしているだけなんだ。それと同様、僕の腕前もひとつの文化的象徴としての……」

ー 本日は大変お忙しい中、長時間にわたるインタビューにご協力頂き、ありがとうございました。